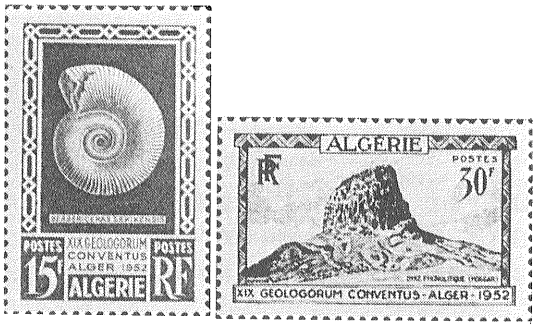
地学と切手



第19回 国際地質学会議の切手

P. Q.

第19回国際地質学会議 (International Geological Congress 略して IGC と呼ばれる) は 1952年9月 長くフランスの植民地であった アルジェリアの首都のアルジェで開かれた. 日本からは戦後はじめて三土知芳 小林貞一 渡辺武男からなる代表団が派遣され ようやく国際社会に復帰することが出来た.

実際には その前の1948年の第18回会議がロンドンにおいて開かれた時には 日本はまだアメリカの占領下におかれており GHQ の天然資源局の S. K. NEUSCHEL や H.G. SCHENCK が出席し 田代修一が日本人のオブザーバーとして随行出席したにすぎなかった. 当時すでにドイツ イタリアは多数の学者をこの会議に送っていたのである.

19回会議はチュニス モロッコも主催者となったので地質見学旅行はこれら3国において行われた. 会議の主なテーマは

① 前カンブリア紀層の区分と対比
② 北アフリカの古生層と世界の他地域との対比
③ 岩石の変形と構造地質学的意義
④ 海底地形と現世の堆積
⑤ 岩脈の成因
⑥ 先史人類と化石人類
⑦ 過去・現世の砂漠
⑧ 乾燥・半乾燥地域の水理地質
⑨ 地球物理学の地質学に対する寄与
⑩ 鉄鉱床の成因
⑪ 燐灰石鉱床の起源
⑫ 地質学上の一般問題

などであった. 会議の報告書 Comptes Rendus は22巻が発行された. 会議の参加者は 82か国 1,129人である.

ひるがえって第1回の IGC が開催されたのは1878年8月パリにおいてであり その後世界の平和が乱されることが幾度かあったが 組織は解散されることもなく現在に至るまでつづいて来た. 日本人が初めてIGCに参加したのは 1885年のベルリンにおける第3回会議に留学中の和田維四郎の出席であり その後1897年ペテルスブルグにおける第7回会議には巨智部忠承が出席して以来 日本から必ず参加するようになった. 第7回には日本から100万分の1地質図が出品されている.
IGC の仕事の中には各国の地質調査事業に関係することが多いので 従来はわが国から地質調査所の所員が必ず1人は出席するのが慣例となっていた. しかし IGC 会則のもっとも重要な1項は 地質学の分野に関係のある学者ならば誰れでも参加することが出来 会議の運営方針は各国の政府 学士院 学会 大学などの正式代表で構成された評議員会で討議されるが そこで議決された事項は さらに個人の資格で参加した地質学者の出席した総会の議決で正式に決定され 実行に移されることである.

会議の参加者は回毎に増えて前回第24回モントリオールにおいては101か国3,700人に及び マンモス化に対する反省が生れるにいたった. 25回は1976年8月16日から25日にわたって オーストラリアのシドニーで行われた. この時は2800人の研究者 450人の同伴者 350人の学生が参加し 日本からも61名という最大の多数がみられた. 提出された論文は 分科会 770 シンポジウム 425 と前回より多く 日本からも39の論文が提出された. しかし経費の面では モントリオール会議の約4分の1 25万オーストラリアドル (約1億円) となりこの点で反省がみられる. 今回は中国の IUGS の加盟台湾の追放もあり 論議の的ともなった.

次の第26回は IGC 100年を記念してパリで行われることになっている. が その次の1884年第27回会議は日本も招待立候補3国のひとつになった. 会議がアジアで開く意義が強調されているおりから行方が注目される.

切手 は 1952年8月11日発行のもので 15f は化石オーム貝 *Berbericeras sekikensis* 30f は響岩の岩脈である.